（資料２）わくわくするか・ふさわしいかの実践例（記事は佐賀新聞／ R2.10.22 朝刊５面より）

1組 ＃子 12号；氏名

ふさわしいか

№ 02　11月 4日

わくわくするか

◇記事などの本文を読む前に直感で感じたことを。

◇◇「わくわく」に代わる言葉で直感を表現しても良い。

この言葉から、何か大きな事（戦い）があった裏で目立たず戦ってくれている人がいて、その戦いをもう一つの戦いと言っているのかと思った。

もう一つの戦い

（　）元々文章中にある表現（タイトル）

（　）使われていた表現を一部改変

（　）出題者が新たに作成

とてもふさわしいと思う。輝く表舞台で戦っている裏で自分自身と戦ってきたのだろうと一進一退の病状をしのぎ、の部分から思った。周りからは一つの戦いに見えても、その裏ではどんな戦いがあったのかみんなわからない。それでも、引退するまで二つの戦いを戦い続けたのはすごいと思った。

◎記事等を読み「本文中にあることがふさわしい」「この表現の仕方はふさわしい」と考える、根拠と理由を書こう。

◎◎こちらの方がふさわしく、しかもわくわくするという、代案・改案はないか。

時言

もう一つの戦い

ボートレースのベテラン、今村豊さんが引退した。デビュー以来39年、一度もトップクラスを落ちることなく、59歳の今日までファンに愛された名選手だ。

直接の理由は、最低体重基準が近く1キロ増量されること。その1キロが重く、食べるのが苦痛になっていたのだという。ただ、今村さんには30代から、体重維持とは比較にならないほどの、もう一つの大敵がいた。

メニエール病。難聴や耳鳴りなどを伴って、めまい発作を繰り返す。時速80キロで水面を疾走するボートレーサー。しかも、減速せずにコーナーを回る「全速ターン」を編み出したパイオニアをこの病気が襲うとは、何という巡り合わせだろう。

発作が起きると平衡感覚が乱れ、天地が分からなくなる。耳の中でジージーとセミが鳴くような音が響く…。レース場から病院へ直行したことも。40代で再発し、左耳がほぼ聞こえなくなった。引退も頭をよぎった。

過労やストレスで発症しやすいと聞き、心当たりがあったという。「選手宿舎の風呂でスリッパがそろっていたら、中に今村がいる」。そんな逸話があるほどの、自他共に認める生真面目さだ。

今村さんは、病気を理解し、対処した。「ストレスをどう緩和できるか、医者になったつもりで考えた」。一進一退の病状をしのぎ、最後まで成績を維持し続けた。

中高年では体に心配がない人の方が少ないだろう。多くの人は何らかの支障を抱えて働き続けている。今村さんは、そんな時代の一つの生き方を示してくれた気がする。

「レースの恐怖心は決して減らず、怖さを感じずに走ったことは一度もない。完全に治るとすれば、仕事を辞めてから」。そう語っていた日がとうとう来た。お疲れさまでした。（由）